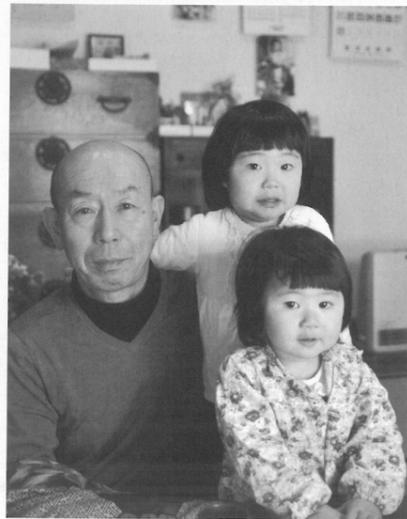


INTERVIEW

本質が変わらなければ、時代に合わせたスタイルになっていい



小平瀨区長 佐藤 善司 さん

大切なものを後世に伝承していきたい。そう語る佐藤さんの傍らには、2人のかわいいお孫さんが寄り添っていました。2人もやがて鳥追いの歌を歌うことでしょう。

小平瀨地区では、古くから鳥追いのことを「かっか」と呼んでいます。これはおそらく鳥の鳴き声からきているのだと思います。かっかには、小学校入学前の年長児から小学六年生までの男子が参加します。稲わらで編んだ「いじこ」という入れ物を持って、歌いながら村中を回り、ミカン、お菓子やお金などをもらいました。子どもが多いころには、右回り組と左回り組で回ることもありました。また、かっかの日の朝、稲わらでいじこを編むのが親の仕事でした。そんなかっかですが、当時とは様子が変わってきました。いじこを作れる人が少なくなっただけでなく、いじこを持って歩くこ

とはなくなりました。地区の子どもたちもずいぶん減りました。このままではかっかを伝承していくことができなくなる。そう考えたわたしたちは、今年からかっかに女の子も参加してもらうことにしました。口伝により伝承される行事は、一度途絶えると再現することが難しくなります。大切なのは後世に伝承していくことです。かっかに込められた五穀豊穡への願い。その本質が変わらなければ、時代に合わせたスタイルになってもいいのではないのでしょうか。これからも地区の文化や伝統を大切に、伝承していきたいと思っています。

各地区の鳥追い



○樋ノ口地区

【歌詞】 今日はどここの鳥追いだ、長者さまの鳥追いだ。雀の頭を八つに割って、戸棚に入れて、さんどがしまへ追い流せ あーほ あらほ あっちゃんほー  
【対象】 小学1～6年生(幼い兄弟姉妹も参加可能) 今年約30人が参加  
【コメント】 6年生で今年が最後なので、一生懸命歌いました。幼稚園のころから毎年参加していたのでさみしいです(阿部智成さん 吾妻小6年)。楽しかったです。これからもずっと続けてほしいです(小椋岳大さん 吾妻小6年)。



○小田地区

【歌詞】 今日はどここの鳥追いだ、長者さまの鳥追いだ。さーらばさつと追いまわしよ 雀の頭を八つに割って、戸棚に入れて、さんどがしまへ追い流せ あーほ あらほ あっちゃんほー  
【対象】 小学1～6年生(幼い兄弟姉妹も参加可能) 今年約20人が参加  
【コメント】 鳥追いの意味はあまり分からないけど、みんなでやるのが楽しいです(五十嵐翔月さん 吾妻小6年)。子どもたちは大きな声で頑張りました。行事を伝えていくことが大事だと思います(一ノ瀬美由紀さん 保護者代表)。



○小平瀨地区

【歌詞】 今日どここの鳥追いだ、長者さまの鳥追いだ。雀の頭を八つに割って、こだらにぶちこんで、鬼ヶ島さ追い流せ あっちゃんほー あっちゃんほー  
【対象】 年長児～小学6年生(昨年までは男子だけ) 今年4人が参加  
【コメント】 寒い中を走ったり歩いたりして疲れました。でもお菓子やおこづかいをもらえてうれしいです(齋藤瑞空さん 緑小1年)。地域行事なので頑張って継承して欲しいです。寒い中お疲れさまでした(齋藤洋子さん 保護者)。

特集

絶やさない 伝統の火を

小正月の伝統行事として受け継がれてきた鳥追いや歳の神

少子高齢化が進む中、各地区に伝わるこれらの行事も参加者が減り、その存続自体が危ぶまれています。地域の伝統行事をもう一度見つめ直しその意義について考えます。



鳥追い

秋の収穫まで、スズメやカラスなど作物を荒らす害鳥による被害に遭わないことと、五穀豊穡の願いを込めて、年の初めに祈りをささげたことから始まったとされる。関東・信越から東北にかけて広く分布する年中行事

作物の害鳥を追い払う

鳥追い

一月十四日の夜、子供たちが一団となって地区内を回り、大きな声で歌いながら作物の害鳥を追い払う「猪苗代の鳥追い」。

「今日はどこの鳥追いだ 長者さまの鳥追いだ さらばさつと追いまわしよ 雀の頭を八つに割って 小俵に詰め込んで 隣の村に追い流せ ヤーホー、ヤーホー」 などが代表的なものです。しかし地区によっては歌詞や節回しに微妙な違いがありました。昔は多くの地区で実施されていた鳥追いですが、現在は五地区だけです。鳥追いが実施されなくなった理由には諸説があります。一、いち早く隣の村(集落)に害鳥を追いやるので、追い込まれたとされる村では大いに立腹し、悪態の応酬になる。隣村同士が争いをしてしまうので、とうとうこの行事をやめてしまいました。二、戦争で行事が中断された後、そのままやめてしまいました。

三、集落の子どもたちが少なくなつて、行事の存続自体が困難になり、やめてしまいました。この三つが主な原因と言われています。今も鳥追いが残る地区のうち、三地区の鳥追いを紹介し、その違いなどを紹介します。

【地区の特色】 樋ノ口、小田の両地区は、隣接しているせいか大きな差は見られませんが、小田地区には「さーらばさつと追いまわしよ」の歌詞があります。両地区に共通する「戸棚に入れて」の「戸棚」、小平瀨地区の「こだら」は、「小俵」が次第になまったものと考えられると意味が通ります。「さんどがしま」は佐渡ヶ島がなまったもの。小平瀨地区では「鬼ヶ島」と歌っています。また、小平瀨地区では一、鳥追いを「かっか」と呼ぶ二、一軒一軒の玄関にも入って歌う三、以前は二番まで歌詞があり、一番は「雀の頭を四つに割って小俵」二番は「カラスの頭を八つに割って大俵」と歌っていたことなど、ほかの地区とは違った点が見られます。このように、地区によってさまざまに変化してきた鳥追い。地区独自の伝統を大切にしながら、この行事を続けてほしいです。

INTERVIEW

地域と企業のコラボレーション  
残していきたい伝統だからこそ  
こんな形があってもいい。



町商工会長瀬支部長 石田 信義 さん

大みそかから元旦にかけての初詣で、川桁の八日市、そして歳の神は、商工会長瀬支部の正月三行事として重要視されてきました。これからもその伝統を守り続けていきます。

町商工会長瀬支部が主催する歳の神行事は、幸野、川桁、新屋敷、曲淵、東館、白津、道下、相名目中ノ目の各地区、そしてリステル猪苗代の協力で実施されています。昔は地区ごとに実施されていましたが、火災予防などの観点から広い場所が必要になり、徐々に少なくなってきました。歳の神を続けるため、新しい場所を探していたところ、宿泊客に会津地方の伝統行事を体験してもらえようとするリステル猪苗代と、広い場所できやかに歳の神を開催したいわたしたちの利害が一致し、一緒にやっていくことを

決めました。秋になると、長瀬支部の会員はカヤを刈ってリステル猪苗代の敷地にある松林に運び、歳の神に備えます。リステル猪苗代では、宿泊客にチラシを配るなどして歳の神への参加を呼び掛けています。こうしたお互いの努力により、毎年にながやかな歳の神が実施されています。今年は韓国から観光客も訪れました。地域と企業がこういったケースで力を合わせることは町内でも珍しいと思いますが、残していきたい伝統行事だからこそ、こんな形があってもいいと思います。

のが達沢地区です。歳の神は、十四日に開催されます。その日の朝に焼いたもちを棒に刺して焼くという地区は、町内でもごくわずかです。また、会場にこなかった人の家を回り、雪で溶いて黒くした炭を人々の顔に塗って歩くのが「炭塗り」です。これにより一年の厄を除け、無病息災のまじないとするのも達沢地区独自のものです。「昔の歳の神は、そりやあにぎやかなもんだつたよ」「厄払いに厄年の人数分の歳の神を立てて燃やしてたからな」「太鼓を叩いて、笛を吹いてよ」「あすなるの木を芯にして燃やすと、バリバリとすごい音が出てな」地区の人たちは、懐かしそうに話します。現在は青年会の人数が減ったため、太鼓や笛はなくなりました。「歳の神や十八日の神楽は青年会の行事でしたが、人数が少なくなり事業の実施が難しくなりました。そこで、OBの人たちにも参加してもらい、青年会は文化保存会に生まれ変わりました。神楽は老人クラブが担当しています。昔と比べてにぎやかさはなくなりましたが、大切なのは行事を続けていくことです。地域の伝統を守るのと同時に、地区の人たちが顔を合わせる機会にもなりますから」文化保存会の小椋新一会長はそう話しました。

未来の歳の神 現在、町内で歳の神を実施している地区は、六十六地区。半分以上の地区で歳の神を実施しています。鳥追いをする地区は少なくなりましたが、歳の神を実施している地区がこんなに残っているのはなぜでしょうか。取材する中でいろいろの人に聞きました。「簡単に捨てづらいつめ縄飾りや神札などを処分するのにちようどいから」という現実的な意見や「大人も参加する行事なので、十分に人がいるからだ」という話もありました。しかし、六十六地区のうち二十地区では、参加者を増やす目的や仕事を休まずにすむといった理由から、歳の神を休日を実施するようになりました。一年間の厄を払い、無病息災を祈るといふ本質は変わらないまま、時代や社会情勢に合わせて、地区ごとに実施されてきた歳の神。この行事でもう一つ得られるものが地区の人たちと一緒に一つのことをやり遂げるという連帯感です。わたしたちが無意識のうちに歳の神に求めているのは、こういう人と人とのつながりなのかも知れません。だからこそわたしたちは歳の神を大事にし、これからも続けていこうとしているのではないのでしょうか。

失われそうな伝統がある反面  
根強く残るものもある  
町内の半分以上の地区に残る  
歳の神という伝統  
そこに込められた意義とは



1月15日に実施された百目貫地区の歳の神。子どもたちは猛々しい炎の迫力に目を奪われていました。

# 歳の神

一年の無事を願い、厄を払う

歳の神は、小正月に実施される火祭りの行事で、日本全国で広く実施されています。会津地方では主に歳の神と呼ばれています。大沼郡三島町では、「三島のサイノカミ」と呼ばれ、国の重要無形民俗文化財に指定されています。宮城県ではどんと祭と呼ばれており、他の地方では左義長、どんどん焼き、おんべなど呼び方が異なります。行事自体も地方によってさまざまな違いがありますが、その多くに共通しているのは、一月十四日または十五日の夜、刈り取った後の田んぼなどの広い場所に、長い竹または神木などを立ててそこにワラやカヤなどをつけます。その上に今年飾った門松、しめ縄飾り、古い紙幣や神札などを飾りつけて燃やすというものです。また、その火で焼いたもちを食べべたり、灰を持ち帰り自宅の周囲にまいたりすると、その年の病や厄を除きます。書き初めを焼いた時に炎が高く上がると字が上達するなどと言い伝えられています。



その日についたもちを焼く達沢地区の歳の神。

## 過去の歳の神

猪苗代町の歳の神は、一月十五日か十六日に開催されてきました。歳の神では、棒の先にもちやするめを刺したものを焼き、それを食べると脳病みにならない(頭痛にならない)、腹痛にならない、風邪をひかないなどと言われています。厄除けの意味もあるとされ、これらは現在も続いています。また、その火でつけたたばこを吸えば虫歯にならないとも言われます。歳の神の日だけは子どもたちの喫煙を大目に見たという時代もありました。

## 現在の歳の神

町内でも独自の風習が残っている

# 地域に伝わる伝統は 形を変えながら 受け継がれていく

## 取材を終えて

時代は刻々と変化している。地域の文化や伝統は簡略化され、本来持つ意味さえ失ってしまったものもある。残念であると思う反面、そこまでして地域行事を残す意義について考えてみた。

その意義とは、地域の人々が一体となって何かを成し遂げることの素晴らしさや古き良き時代から受け継がれてきた行事の本質を理解し、次世代に伝えていくことではないだろうか。

歳の神という行事がもたらす地域の一体感は、核家族化などにより失われた世代間の交流や隣近所という地域コミュニティの存在を確かに感じさせてくれる。そんな貴重な時間を過ごせるだけでも地域行事には大きな意義がある。

地域行事に参加し、自分の暮らす地域の文化や伝統について学ぶことで、自分の住む地区にもっと愛着がわく。誇りに思うことができる。

その誇りを次世代に引き継いでいくためにも、やはり地域行事は必要だ。

絶やしてはいけない 伝統の火を。

特集 絶やさない 伝統の火を  
終わり

参考文献 猪苗代町史(民俗編)  
協力 各行政区長

1月15日、リステル猪苗代で実施された歳の神  
近隣の住民や宿泊客など多くの人が参加し、今年1年  
の無病息災を祈った